

挾間町の街道を思う

坂本勝信

一 定説古代官道ルートへの疑問

『豊後風土記』による古代の豊後道は、大宰府と直結する道路で大分郡内に一つの駅家があったと記されています。

しかし、そのルートをたどるためのヒントとなる地名の記載が見られません。

『延喜式』にいたって『高坂』という地名が初見ですが、『高坂駅』は『宇佐神宮神領大鏡』などにより、現大分市の上野が丘の東南部あたりとのことで、ここが豊後道の起点であろうというのが定説となつていようです。この『高坂』が風土記記載の大分郡に一つ、という駅家と考えられます。

さて起点である『高坂』を発した豊後道は次の駅であり現湯布院町川上あたりとされている『由布駅』に向かうのですが、『由布駅』へは具体的にどのような経路をたどったのでしょうか。

戸祭由美夫氏の古代の交通路Ⅳでは現別府市の『長湯駅』を経由したと、そして長湯へは高崎山南西麓の銭亀峠を経ていたと推定しておられます。私は官道の設置が最短距離主義であったとする諸説から、及び地形から、この長湯経路説に疑問をもっています。豊前道との接続という観点から、たしかに長湯【別府】から豊後国分に通じる経路として、長湯・銭亀・高坂の道路を否定するものではありませんが、鶴見山から高崎山間のあの険峻な地形から、最短主義

上、大宰府へ向かう豊後道が、一度別府へ降り、再び別府から山を登り由布院へ向かったとは思えないのです。

二 地形からの推定

地形を大まかに観察してみますと、大分市上野から西の地形は大分川が湯布院盆地まで遡上し、その北側は賀来で支流賀来川・石城川・由布川に地勢が南北に分かたれています。小野屋付近から西側は更に大津留川で南北に地勢が分かれています。分かれた地勢はいずれも東から西に逐次標高を高めながら由布岳・雨乞岳方向に向かって、だんだらの丘陵の感を呈しながら『捏山』地域に集約しています。その中で注目したいのが、賀来川・由布川の右岸に沿った丘陵で、大分市と湯布院盆地を最短距離で結んだ丘陵です。現挾間町の医大・黒野・赤野・朴木・堺の丘陵です。この地域に谷は一つも存在せず橋梁を全く必要としない地形でもあります。

土木工事の技術水準からも古代、この地形を選ばないはずはないと考えられるのです。

三 古絵図からの推定

(1) 日根野時代府内藩領図（添付）

時代は律令時代からいきなり江戸初期に飛びますが、大分市歴史資料館蔵のこの絵図では、挾間町内には2本の幹線と思われる街道が赤色の線で表示されています。

2本とも現賀来神社東側の大分川と賀来川の合流点の上流で、別々に川を渡り、現医大のある丘へ上っています。

北側の街道は前述の医大・黒野・赤野・朴木を経て西に町内を通

過しています。この道路こそが、古代官道が延々と活かされ続けた街道ではないかと考えます。昭和四十年頃、大分から堺への乗合バス「堺線」の経路とおおむね同じではとも思うと、この街道の渡渉点は東院宮苑間の中村付近かとも推測されます。

日根野時代府内藩領図を元絵としたとされる臼杵藩の「豊後国八郡絵図」が昨年暮れに公開されたのを見ましたが、これにも、任限「賀来村」東院「(賀来川渡河)」と村名をつないでこの丘陵を西に伸びておりました。

ちなみにもう1本の南側の街道は賀来川を(東院付近か?)渡ったあと野田あたりを通り、下市・向之原、それから大分川左岸にそって庄内町に向かっていきます。挾間氏居城の跡や、市がたつてにぎやかだったという下市等を考えると、いわゆる生活道路として官道とは別に発展した街道と考えられます。

(豊前道の観点として、銭亀峠を通る街道は大分市神崎・白木付近から高崎南側をまいたように記されており、山口・七蔵司あるいは高崎といった村落のかなり北側に記されています。

(2) 豊後国細見絵図

天保十三年に日田滴々軒浩水が中心となって出版したたといわれているこの絵図には各村落名がさらに細かくしるされていますが、現挾間町内地域では、街道としての規模の判別が確かではありませんが、やはり由布川右岸の丘陵を日根野絵図と同様に記されています。

また、大分川左岸に沿って下市・向原、そこから現国道二一〇号

線に沿った線(前述下市経由)もありました。

四 挾間町内を通過したにちがいない歴史の数々

もし私の推定のように官道あるいは西へ向かう街道が挾間町の中央地域を西へ向かって一直線に伸びていたとするなら、歴史上どんな場面が町内を通過したのか、わくわくしながら思いを馳せてみました。

(1) 白村江の戦いや壬申の乱は?

国指定の遺跡「古宮古墳」(大分市椎迫)に行ってみました。この主と推定されている大分君恵尺(おおいたのきみえさか)は軍団を率いて現福岡県朝倉の飯宮や奈良吉野へ、どんな経路で移動し、大海子皇子の傘下に入ったのでしょうか。少なくとも朝倉へは挾間の地域を馬に鞭うちながら急いだのに間違いないと考えられます。

(2) 蒙古軍への対応も

蒙古襲来の2度目の弘安の役前の準備段階では大友氏に九州探題を幕府が命じたり、戦いにおいては消極性を叱咤されたり、あるいは挾間氏が役後に感状を付与されたという史実から、町内の街道を、博多へ向かい御家人集団が駆けたことでありましょう。

(3) 戦国時代は大友軍団の常用経路だったのでは

数次に渡る肥前竜造寺攻撃や、対山内氏対応のための戸次氏派遣などには、常に挾間町を通過して作戦していたと思います。

(4) 配流途中の失意の人々も?

大宰府に左遷された菅原道真公に関する伝説が町内にも残されている由を史談会でうかがったことがありましたが、左遷がきまり大

宰府へ急ぎ赴く必要のない、失意の旅のルートとして、瀬戸内海を舟で下り、大分へ上がり、のんびりと大宰府へ向かったことも十分考えられます。その途中、挾間町内を通過した、というのが実は事実かもしれません。

五 あとがき

国の行政道としての官道は全国に張りめぐらされていたはずですが、これまで遺跡として発掘されたのは数例しかありません。大分県内では直入郡内に官道駅舎施設ではなからうか言うのが一例ありますが、残念ながら旧大分郡内にはありません。

数年前に、朴木から堺に出て、堺の大津留から上がってくる道路との交差点を過ぎて約一〇〇メートルほどの所に、左手に狭い山道があり、それをずっと西に入ってみたことがあります。地図上では間違いなく由布院の『捏山』に向かっています。これが官道跡ではないかと思っただけがあり、それ以来、銭亀峠経由という豊後道ルートに疑問を感じてきました。江戸期の絵図を見る機会があり、益々その思いが強くなり、今回、地図を見ながら空を飛び回った前歴の私の経験をもとに、大胆に古代官道ルートを推測してみました。医大西側で、由布岳・鶴見岳・高崎山などのパノラマを見ると、ここを通過していったであろう数々の情景が浮かび、これもひとつの史談かな、と思うのであります。

【参考】
……
日根野時代御領藩図



(大分市歴史史料館蔵)